

地方における新しい働き方と働く場所  
：群馬県内のコワーキングスペースを中心に

若林 隆久

# 目 次

---

●序 章	はじめに .....	1
●第1章	新しい働き方と働く場所 .....	7
●第2章	新しい働き方と働く場所の登場の背景 .....	13
●第3章	群馬県内のコワーキングスペース .....	15
●第4章	県外・海外のコワーキングスペース .....	30
●第5章	地方における働き方と働く場所 .....	33
●終 章	おわりに .....	36



---

# 地方における新しい働き方と働く場所

：群馬県内のコワーキングスペースを中心に

若 林 隆 久

---

## 序章 はじめに

今日は朝から高崎駅前にあるお客さんのオフィスで打ち合わせ。

早めに駅に着き、近くのスターバックスで打ち合わせの確認しつつ、他のお客さんからの問い合わせにメールで返信っと。電車の中のスマホだけじゃ、さすがに時間は足りないな。効率も悪いし。ま、そもそも普段は車だから、それすらできないんだけど。

打ち合わせが終わったら少し歩いたところに最近できたコワーキングスペースで仕事をしてみるか。

できたばかりで雰囲気もどんな人がいるかもわからないけど、その分面白い出会いがあるかも。新しい場に顔を出さないと、新しい情報も入ってこないし、人脈も広がらないからなあ。

この間のぞいた感じではオシャレで快適そうではあるから、話し相手がいなければ集中して仕事をやるもよし。

とはいえ、昨日もずっと自宅仕事だったから、ぜんぜん人と話してないなあ。

明日は朝からちゃんと入居してるシェアオフィスに行くか。

入って1年経つけど、最近はみんな忙しいみたいで、誰かいるかなあ。

まあ、明日は月曜だから夕方にはいつものイベントもある。

朝は窓際のハイテーブルで仕事して、集中できなくなったらソファ席でだらだらしよう。

午後のSkype打ち合わせ、会議室がうまい具合に空いてるといいなあ。

この文章は、本書で紹介する新しい働き方や働く場所に関する風景の一部分を切り取ったものです。読者の中には、出てくる単語も含めてまったくピンと来ないという人もいれば、新しいというけど少し古臭い部分もあるのでとは感じる人もいるかもしれません。新しい働き方や働く場所についての説明は後に譲るとして、上の文章でお伝えしたかったポイントは、①待ち時間のカフェや移動中の電車など場所を選ばずに仕事をしていること、②それどころか働き方や働く場所を自分で選んでいること、③個人で自由に仕事をしているように見えて他者との交流も重要な要素として登場していること、です。

## 本書の説明

本書の目的は、新たに登場してきている働き方や働く場所について紹介することです。もちろん、はるか昔から現在に至るまで、働き方や働く場所は常に変化を続けてきました。しかし、情報通信技術（Information and Communication Technology, 以下では ICT と表記します）の発達を中心とした社会の変化に伴い、ここ 10～20 年ほどの間に働き方や働く場所に大きな変化が訪れ、いまなお変化を見せ続けています。それが、本書で紹介する新しい働き方や働く場所です。

本書では、高崎市をはじめとした群馬県内の地方都市を念頭に置いて、新しい働き方や働く場所を紹介していきます。働き方や働く場所に関する大きな変化の多くは東京のような大都市を中心に広まっており、一方で、一部は過疎地域と呼ばれるような地方を舞台に登場しています（例えば、徳島県神山町では先進的な取り組みがなされています）。そのため、大都市でもなければ過疎地域でもない地方都市では、新しい働き方や働く場所について、これまではあまり広まっていないし認識もされてこなかったかもしれません。ところが、最近では徐々に地方都市にも浸透してきている様子が伺えます。高崎市に関していえば、2019 年 1 月に高崎駅内に駅直結の Office TAKASAKI BASE、2019 年 5 月に高崎駅から徒歩 8 分程度の連雀町に大型の TREE 高崎、といったコワーキングスペース・シェアオフィスが相次いで登場しています。読者の中には、目に付きやすいこれらの施設が気になっていた方もいるかもしれません。このような新しい働き方や働く場所の地方都市への浸透が本書の執筆の動機にもなっています。

本書では、新しい働き方や働く場所の中でも、特に働く場所のひとつであるコワーキングスペースの紹介を中心に据えています（本書で紹介する事例は序章末尾の第 1 表参照）。これは、上述のように①最近になって群馬県内で新しいコワーキングスペースがいくつも登場してきていること、②働く場所は物理的に存在しているため働き方に比べて多くの人の目に付きやすく気になっている人も多いのではないかということ、③誰でも利用できる場所なので読者の方にすぐにでも足を運んで利用してもらえること、などが理由です。もちろん、働き方と働く場所は別個のものではなくお互いに関連しているので、新しい働く場所であるコワーキングスペースの紹介を通じて新しい働き方の紹介もできると考えています。

本書の構成は以下の通りです。まず、第 1 章で新しい働き方や働く場所について、冒頭のように具体的な姿を示しながら説明していきます。第 2 章では、新しい働き方や働く場所が登場した背景を整理します。第 3 章では、群馬県内にある 16 のコワーキングスペースを紹介します。第 4 章では、視野を広げるために県外および海外のスペースを 3 つ紹介します。第 5 章では、地方における働き方と働く場所について簡単な総括をします。最後に、おわりにで本書の背後にある目的を書いて締めくくります。

## 本書の狙い

ここまでの本書の説明を踏まえた上で、本書の狙いとして以下の3つが挙げられます。

- ① 知ってもらう
- ② 理解してもらう
- ③ 使ってもらう

①新たに登場してきている働き方や働く場所について知ってもらいます（主に第1章）。様々な読者の方がいるかと思いますが、最近の動向でありまだ馴染みがないであろう新しい働き方や働く場所について、まずは知ってもらおうと思います。もちろん、自分とは関係ないという人も多いかもしれません。しかし、現在の自分とは関係なくても将来の自分とは関係があるかもしれません。あるいは、友人や知人といった自分と関係する人には関係があるかもしれません。新しい働き方や働く場所にはどのようなものがあるのか、その用語を中心になるべくわかりやすく説明できればと思っています。

②新しい働き方と働く場所の登場の背景を理解してもらいます（主に第2章）。既に述べたように、現在働き方や働く場所には大きな変化が訪れており、これからも変化が続いていきます。そのため、本書で紹介できるのは、あくまで現時点における新しい働き方と働く場所です。現在を過渡期であると考えると、現状を知ってもどうせ変わってしまうのだから意味がないと思われるかもしれません。しかし、現時点の新しい働き方と働く場所が登場してきている背景についても理解してもらえれば、今後の変化の方向性を多少なりとも予想できるかもしれません。

③本書で紹介する新しい働く場所を実際に使ってもらいます（主に第3章）。どんなに筆舌を尽くして説明しても言葉だけの説明には限界があります。新しい働き方や働く場所を知ってもらったり理解してもらったりする最良の方法は、実際に体験して肌で感じてもらうことなのではないかと思っています。それぞれに事情もありますので、すぐに働き方を変えてみるということは難しいかもしれません。しかし、本書で紹介する新しい働く場所であるコワーキングスペースであれば、多くの人がすぐに足を運んで利用できます。オープンで敷居が低いことがコワーキングスペースの特徴でもあります。このような狙いもあってコワーキングスペースの紹介を本書の中心に据えています。

どのようにコワーキングスペースを利用するかにも様々なパターンがあるかと思っています。高崎経済大学ブックレットの想定読者は高崎市民や群馬県民であり、本書で紹介するのは大部分が群馬県内のコワーキングスペースです。そのため、群馬県内の人が近くにあるコワーキングスペースを利用するというのが一番多いパターンかもしれません。しかし、高崎経済大学ブックレットはウェブ上で全文が無料で公開されるため幅広い読者を見込めますし、本書第4章で紹介しているものは少数ですが、県外・海外にはたくさんのコワーキングスペースが存在して

います。ですから、群馬県内の人が県外・海外の訪問先でコワーキングスペースを利用して、県外の人から群馬県を訪れた時に本書で紹介する群馬県内のコワーキングスペースを利用する、といったパターンも十分にあるかと思えます。読者の方には、ぜひコワーキングスペースに実際に足を運んでもらい、その様子を見て雰囲気を感じてもらえればと思います。

## 新しい働き方や働く場所への期待

それでは、新しい働き方や働く場所について、知って、理解して、使うことに、どのような意味があるのでしょうか。また、近年になって登場してきている新しい働き方や働く場所の担い手は、どのような期待を持って取り組んでいるのでしょうか。ここでは、個人と地方にわけて説明したいと思います。

個人については、新しい働き方や働く場所について、知り、理解し、使うことによって、新たな選択肢や新たな出会いが得られます。キャリアや働くことに関する意識や環境が急速に変化している中で、従来型の働き方や働く場所しか知らなかったり、伝統的な仕事観やキャリア観しか持っていなかったり、本来は存在する働き方については生き方の選択肢を持っていないことはリスクかもしれません。そこまで大げさに考えなくても、パラレルキャリア、二枚目の名刺、副業・複業といったものにつながるような（詳細は第2章）、自分の可能性や価値観を広げられるような出会いがあるかもしれません。場合によっては、訪れたコワーキングスペースが、自分にとってとびきり居心地の良いサードプレイス（第一の場所である家庭と第二の場所である職場に続く第三の場所、レイ・オルデンバーグ著、『サードプレイス:コミュニティの核になる「とびきり居心地よい場所」』（第2版の訳）、忠平美幸 訳、みすず書房、2013年）となるかもしれません。

一方、日本の地方の抱える問題を解決してくれることも期待されています。地域活性化や地方創生の取り組みが盛んになされていますが、多くの地域は苦境に立たされています。地方の抱える問題には様々なものがありますが、新しい働き方や働く場所に関連するものとして、雇用・経済活動やコミュニティに関する問題があります。

地方には雇用や働く場所がないから人口が減ってしまうという指摘があります。本書で紹介する新しい働き方や働く場所の登場によって、地方における雇用や経済活動の問題を解決できるかもしれません。企業のオフィスを誘致したり、一時的にでも地方で働いてもらったりすれば、雇用や経済活動が発生し、移住する人口や地方に留まる人口、あるいは、関係人口が増加することが考えられます。地域の内外を結びつけたり、地域での経済活動や関係人口を増やしたり、といった役割が期待されています。

また、本書で取り上げる群馬県内の事例の多くにもあてはまりますが、コワーキングスペースのような新しい働く場所は、単に人々が働くだけではなく、地域づくりやまちづくりの場となっていたり、地域内のコミュニティ形成にも寄与していたりします。コワーキングスペースは前述のサードプレイスのような場所に

なり得ます。また、地域外の人でも利用することによって、コミュニティという側面でも地域の内外を結びつけられるかもしれません。

このように雇用・経済活動やコミュニティといった側面から、新しい働き方や働く場所が地域に良い影響を与えることが期待されています。

第1表 本書で紹介するコワーキングスペース（掲載順）

所在地	名称	運営者	ウェブページ
高崎市	Somethin' Else	株式会社 フェアマインド	<a href="https://somethingelse.jp/">https://somethingelse.jp/</a>
	Spectrum Space	グローリーハイグ レイズ有限会社	<a href="https://spectrum-gunma.com/space/">https://spectrum-gunma.com/space/</a>
	タカサキチ	一般社団法人 コトハバ	<a href="http://gunmachiiku.com/salon">http://gunmachiiku.com/salon</a>
	シェアオフィス ippo	株式会社 清水商事	<a href="https://shimizu-shoji.com/lp/">https://shimizu-shoji.com/lp/</a>
	Office TAKASAKI BASE	高崎ターミナル ビル株式会社/ ジーイーエム 株式会社	<a href="https://takasakioffice.com/">https://takasakioffice.com/</a>
群馬県	TREE 高崎	ララハウス 株式会社	<a href="https://tree.lala.co.jp/">https://tree.lala.co.jp/</a>
	田舎フェ	株式会社 ブレインファーム	<a href="https://www.brain-f.com/inacafe/">https://www.brain-f.com/inacafe/</a>
前橋市	comm	一般社団法人前 橋まちなかエー ジェンシー	<a href="https://www.comm-maebashi.com/">https://www.comm-maebashi.com/</a>
桐生市	COCOTOMO	NPO 法人 キッズバレイ	<a href="http://kids-valley.org/cocotomo/">http://kids-valley.org/cocotomo/</a>
	エールクリエイティブ	株式会社エール クリエイティブ	<a href="https://yellcreative.net/">https://yellcreative.net/</a>
	Miraice	太田市役所/ 一般社団法人 なでしこ未来塾	<a href="https://otawomen.localinfo.jp/posts/6501104/">https://otawomen.localinfo.jp/posts/6501104/</a>
伊勢崎市	勉強カフェ 太田スタジオ	株式会社 レゾンデートル	<a href="https://benkyo-cafe.com/gunma-ota/">https://benkyo-cafe.com/gunma-ota/</a>
	コモンツナトリ	合同会社 上州家守舎	<a href="http://josyu-yamorisha.co.jp/">http://josyu-yamorisha.co.jp/</a>

群馬県	みなかみ町	テレワークセンター MINAKAMI	一般社団法人 コトハバ	<a href="https://tw-g.org/minakami/">https://tw-g.org/ minakami/</a>
	下仁田町	下仁田町テレワーク クオオフィス	一般社団法人 コトハバ	<a href="https://shimonita.work/">https://shimonita.work/</a>
長野県	上水内郡 信濃町	信濃町 Nomad Work Center	NPO 法人 Nature Service	<a href="https://nwc.natureservice.jp/">https://nwc.natureservice. jp/</a>
中国	上海	匠新・XNode	匠技新（上海） 創業孵化器管理 有限公司	<a href="http://www.takumi.ltd/">http://www.takumi.ltd/</a>
シンガポール		クロスコープ・ シンガポール	ソーシャルワイ ヤー株式会社	<a href="https://crosscoop.com/office/singapore">https://crosscoop.com/ office/singapore</a>

出典：筆者作成

## 第1章 新しい働き方と働く場所

第1章では、新たに登場してきている、働き方と働く場所、さらには働き方や働く場所を含めた住む場所や生き方に関するスタイル、を紹介していきます。

### (1) 場所を選ばない働き方：テレワーク、リモートワーク、ノマド、フリーランス

育児と介護のために、週のうち3日は会社に行くけど、残りの2日は自宅で仕事。最初はできるか不安だったけど、なんとか慣れてきたかな。

大変だけど、会社に行く日と自宅にいる日でメリハリはついてる気もする。働ける時間は減ってるし、自宅での仕事と育児・介護の両立は難しいけど。そもそもいままでのように毎日会社で遅くまで働くなんて無理だから贅沢は言ってられないか。

本来の仕事場であるオフィスから離れてする仕事を「テレワーク」あるいは「リモートワーク」と呼びます。テレ (tele) もリモート (remote) も「離れて」を意味します。さらには、特定のオフィスに留まらない働き方や仕事を、遊牧民を指すノマド (nomad) という言葉を用いて、「ノマド」や「ノマドワーク」と呼ぶこともあります。同じ文脈で使われることが多い言葉に「フリーランス」もあります。『フリーランス白書 2018』によればフリーランスとは「特定の企業や団体、組織に専従しない独立した形態で、自身の専門知識やスキルを提供して対価を得る人」で、上記の言葉と親和性は高いものの、働き方や働く場所といった点で必ずしも一致するとは限らなさそうです。

政策では基本的にテレワークという言葉が用いられています。ワーク・ライフ・バランスや働き方改革の推進、東京のような大都市における過密解消および地方への分散、といった背景があって、国や自治体あるいは企業などによって積極的にテレワークが推進されています。

テレワークは「ICT等を活用し、普段仕事を行う事業所・仕事場とは違う場所で仕事すること」（国土交通省『平成29年度テレワーク人口実態調査』2018年）や「情報通信技術を活用した、場所や時間にとらわれない柔軟な働き方」（日本テレワーク協会）などと説明されます。国土交通省の『テレワーク人口実態調査』によれば、テレワーカーを、①自宅でテレワークを行う在宅型テレワーカー、②コワーキングスペースやシェアオフィスでテレワークを行うサテライト型テレワーカー、③移動に際しての訪問先、カフェ、ホテルなどや移動中にテレワークを行うモバイル型テレワーカー、の3つに分類しています。

上の文章の事例は、在宅型テレワーカーに分類されますが、在宅勤務を週2日としていることには実は理由があります。テレワークの日数と生産性の関係を調べたところ、週1日または週2日の場合に最も生産性が高くなるという調査結果があるのです。それよりもテレワークの日数が増えると孤立感を感じてしまい生産性が下がるとされています。もちろん、個人差、企業差、業種・職種による違い、国や地域による違い、などがあるかもしれませんが鵜呑みにはできません。な

かには、会社にまったく来なくても成果さえ上がっていれば問題ないとする会社もあるようです。在宅勤務に限らず、どのような場所でどのような働き方をすると効率的なのか、あるいは、どのような制度やマネジメントが効果的なのか、といったことに関する知見が今後積み重ねられていくことが期待されます。

また、上記の孤立感のような新しい働き方の負の側面にも注意しなければなりません。「場所や時間にとらわれない柔軟な働き方」というと良いことのように聞こえますが、見方を変えれば ICT をはじめとした技術の発達によって場所や時間にとらわれずに働かなくてはならないという状況が発生しているのです。育児や介護があっても在宅で仕事ができると捉えるのか、育児や介護があっても在宅で仕事をしなくてはならないと捉えるのか、ということです。もちろん、仕事を辞めることは自由ですし、労働への対価は支払われるわけですが、経済的事情を中心とした様々な事情や、人間の心の弱さや限定された合理性を考えると、企業などの雇用する側としても社会としても注意して制度設計やマネジメントを行わなくてははいけません。フランスをはじめとした欧州諸国では、労働者にテレワークをする権利が認められている（正当な理由がなくては雇用する側はテレワークを拒否できない）と同時に、勤務時間外の仕事上のメールや電話を拒否できる「つながらない権利 (right to disconnect)」を認める法律が定められています。

テレワークを認めると上司や同僚の目がなくなるから、仕事をさぼってしまうのではないかという心配もあるかもしれません。もちろん、そういうこともありえますが、それとは反対に、場所や時間の制約がないために仕事をしすぎてしまう（オーバーワークになってしまう）ということもよく発生するということが指摘しておきます。いずれの場合でも、どのようにマネジメントを行うかが重要になってきます。

2020年の東京五輪の開催や2020年初頭から猛威を振っている新型コロナウイルスの影響によって一層テレワークが推進・実施されていくことが予想され、国・自治体や企業などによる制度や環境の整備がどのように進んでいくか今後の動向には注目です。

## （2）移動中に仕事する：モバイルワーク

この忙しい時期に二泊三日の地方都市出張か。

新幹線の中はもちろん、東京駅での待ち時間でも仕事しないと…。

駅のポスターにのってた、最近できたらしいブース型のシェアオフィスってやつを使ってみるか。

会社の書類がいろんな人の目に触れるのもまずいもんな。

向こうに着いたら、会社が契約している駅近のシェアオフィスってやつも使ってみるか。

移動中における仕事をモバイルワークと呼びます。前項のテレワークの分類の中では、モバイル型テレワークが該当します。上の文章にあるように、移動時間や移動に際してのすき間時間にする仕事です。スマートフォン、タブレット、ノー

トパソコンなどが一般的になったことにより、移動中でも仕事ができる、あるいは、仕事をしなくてはならない状況が生まれています。

それに伴い働く場所も整備されてきています。新幹線や飛行機の中で電源やWi-Fiが利用できるようになってきました。また、上の文章にもあるようにブース型のシェアオフィスとして、東日本旅客鉄道株式会社が運営するエキナカに設置されるSTATION WORK（2019年8月設置開始、写真1）や、テレキューブサービス株式会社が提供するテレキューブ（2018年11月設置開始、写真2）が登場しています。集中できる環境やセキュリティおよびプライバシーといったニーズに応えたもので、東京を中心に設置が進んでいます。また、駅直結や駅周辺に立地するコワーキングスペースやシェアオフィスのターゲットのひとつは、仕事をする場所を探す出張者です。最近では、ライバルとなるカフェや公共施設でも電源やWi-Fiが利用できる環境が整ってきている中で、コワーキングスペースやシェアオフィスの運営者はより質の高いサービスを提供することを考えなくてはなりません。

写真1 STATION WORK



出典：筆者撮影

写真2 テレキューブ



出典：筆者撮影

### （3）新しい働く場所：コワーキングスペース、シェアオフィス

月末にいつものコワーキングスペースでジェリー（Jelly）が開催される。いろいろな人が集まって各自がそれぞれの仕事をするイベントだ。

初めて参加した時は面食らったなあ。本当にみんなもくもくとパソコンの画面とにらめっこしてやっていたかと思えば、いつの間にかおしゃべりパーティーみたいになっている。全員が時間通りにいるわけもなく、途中からふらっときたと思ったらまた出て行く人もいるし、気づいたらいなくなってる人もいる。おしゃべりしているところを見ると遊んでいるようにしか見えないけど、技術的なアドバイスをもらったり、ありがた〜い人生訓をいただいたり、中には新しい取引やビジネスが生まれることもあるみたいだ。僕はまだないけど。。。

まあ、しかし、この場の雰囲気とか仲間とのゆるやかなつながりの感覚とかは、体験してみないとわからないよなあ。

上の文章に登場するジェリーは、コワーキングスペースを特徴付けるものとして語られることも多いイベントです。自宅で仕事することが多くなった起業家の

アミット・グプタ氏とルーク・クロフォード氏が、自宅で仕事しては得られない従来のオフィスにある自然な情報共有や仲間意識が恋しくなり、友人たちに「うちに集まってみんなで（別々の）仕事をしようぜ！」と呼びかけた集まりが最初とされています（佐谷恭・中谷健一・藤木譲著、『つながりの仕事術』洋泉社、2012年）。上に書かれている通り、参加してみないと雰囲気や感覚はつかみづらいと思いますが、なんとなくでも伝わってくれば幸いです。

コワーキングスペースは、2006年にアメリカで生まれ、日本では最初に登場したのは2010年とされています。いまでは日本だけでも無数のコワーキングスペースがありますので、すべてのコワーキングスペースに共通してこのようなイベントや文化があるわけではありません。しかし、場所を共有して働くだけであれば、シェアオフィスやレンタルオフィス（貸し事務所）と同じになってしまいます。そこに利用者間の交流やコミュニティが存在することが前提となっている点がコワーキングスペースの大きな特徴です。

松下慶太氏による『モバイルメディア時代の働き方』（勁草書房、2019年）では、コワーキングスペースを特徴づけるポイントとして、①働く個人、②情報や知識のシェア、③コミュニティの3つを挙げた上で、「働く個人が、情報や知識、スキルをシェアしながらコミュニティが形成される空間・場所」と定義しています。本書でもこのような特徴に着目して、新しい働き方が実践される新しい働く場所としてコワーキングスペースに着目します。第3章の冒頭でも言及しますが、本書ではコワーキングスペースの条件として①広い意味で働くための場所であること、②利用者間の交流が意図されていること、③利用者が固定的にならない仕組みとなっていること、の3つすべての条件を満たしている場合にコワーキングスペースとして取り上げることにします。

働く場所については、既に登場したシェアオフィスやレンタルオフィス（貸し事務所）といった言葉があります。言葉の通り借りることを通じてオフィスをシェアするというところに重点が置かれていると見ることもでき、必ずしも利用者間の交流やコミュニティは前提となっていない場合が多いので、本書ではコワーキングスペースとは区別して用います。

具体的には、コワーキングスペースやシェアオフィスと呼ばれるものの利用形態のうち、フリーデスク（特定の固定席や個室を定めず、決められた範囲を自由に利用できる形式）の月額契約やドロップイン（1時間や1日単位の時間利用、ホットデスクとも呼ぶ）で利用する場合や、参加者を狭く限定しないイベントを開催する場合には、利用者間の交流が生じる可能性が高いと言えるため、本書でいうコワーキングスペースとしての利用に近いと思われます。一方で、月額契約でバーチャルオフィス、固定席、個室を利用する場合には、必ずしも利用者間の交流が意図されているとは言えません（もちろん、交流が生じる可能性もあります）。このような利用は本書でいうシェアオフィスとしての利用に近いと思われます。明確に区別することはできませんが、本書では上記のような考え方に基いて、主にコワーキングスペースとシェアオフィスという言葉を使っていきます。

また、テレワークオフィス、サテライトオフィス、リモートオフィスといった

言葉も存在します。これらは本拠地となるオフィスがあり、そこから地理的に離れた下位に位置付けられるオフィス、あるいは、一時的に利用するオフィスという意味合いが強いようです。シェアオフィスやレンタルオフィスの形式で提供されることもあります。本書では、コワーキングスペース、シェアオフィス、レンタルオフィスといった言葉とは区別して用います。

#### (4) 仕事と余暇の融合：ワーケーション

最近人は人も減らされてる上に、産休・育休、介護休暇、メンタルヘルス、でさらに人が少なくなってるから、仕事の量がたまったもんじゃないよ。

これじゃあ、いつ休みが取れることやら。

俺だって家族と過ごしたいよ。

家族と一緒にリゾートに行つて仕事と休暇をするワーケーションなんてニュースで言つてたけど、……旧態依然のうちの会社じゃ無理か。

ワーケーション (workation) とは、仕事 (work) と休暇 (vacation) を組み合わせた造語です。本来は別物である働くことと休暇することを、あわせて行ってしまうという働き方、あるいは、休暇の過ごし方です。働きながら休む、あるいは、休みながら働くとも表現できます。1週間や1か月間などの一定期間の滞在を前提に、帰省先やリゾート地などの旅行先で仕事と休暇の両方を行うというワークスタイルです。例えば、1週間のうち月曜日から木曜日までの4日間は長野県信濃町にあるサテライトオフィスで仕事を行い、木曜日の夜に家族と合流して、金曜日から次の月曜日までは家族で自然を満喫しながら休暇を楽しむという例が考えられます。普段とは違う環境に身を置くことによる新たな発見や創造性の向上、豊かな自然環境に囲まれた場所で過ごすことによるリフレッシュ効果や生産性の向上、有給休暇取得の促進、といった効果が見込まれます。2017年7月に日本航空株式会社 (JAL) がワーケーションの導入を2か月間行う発表をしたことが話題になりました。当然、どのように労働時間を管理するかや仕事と休暇の区別をつけるかといったマネジメントには注意しなくてはなりません。

#### (5) 一箇所に定住しない生き方：デュアラー、アドレス・ホッパー

月曜から水曜までは東京。木曜から日曜までは長野。

転勤と子どもの関係でしかないんだけど、慣れれば慣れるもんだね。

世間ではデュアラーなんて言われてるけど、二箇所で生活するのも飽きなくて楽しいな。東京には東京、長野には長野の魅力があるし。

ずっと動き続けるアドレス・ホッパーだともっと楽しいのかなあ。

最近では「デュアラー」(二拠点生活者)や「アドレス・ホッパー」(特定の拠点を持たない生活者)といった定住しない生き方が注目を集めています。働き方や働く場所を越えて、住む場所や生き方にも新しいものが登場してきているので

す。中には、長倉顕太氏による『移動力』（すばる舎、2019年）のように、これまで当たり前であった定住の問題点を指摘し、移動する生活の素晴らしさを説く本も登場しています。また、社会の変化に合わせて、「全国住み放題」や「世界を旅して働こう」といったコピーをうたったADDRESS (<https://address.love/>)やHafH (<https://hafh.com/>)といった多拠点系のサービスも登場し、定住しない生き方を支えるインフラも整ってきています。

微妙に住むと書いて「微住」という造語も存在します。ブログ「日本微住計画」(<https://satoshohei.com/>)を主宰する佐藤翔平氏による造語で、「移住・定住」と「旅での滞在」の間にあるような、「旅するように暮らす」「暮らすように旅する」をバッグひとつで実現する前向きな仮暮らし的生活スタイルであり、地域とつながるソーシャルアクションのことを指します。佐藤氏は、2014年4月から2019年3月の5年間を日本国内の様々な地域で過ごしながら、様々な地域の人々や活動に関わりました。その様子は「日本微住計画」のブログで、詳細に情報発信されています。アドレス・ホッパーの一事例でもあると思いますので、ぜひご覧ください。なお、佐藤氏には2019年7月22日に開催された高崎経済大学地域科学研究所第13回公開講演会で「日本微住計画―旅でも移住でもない、定住しない暮らし方―」という演題で詳しくお話してもらっています。

## 第2章 新しい働き方と働く場所の登場の背景

第2章では、第1章で紹介した新しい働き方や働く場所が登場した主要な背景として、(1) ICTをはじめとした技術の発展、(2) キャリアや働くことに関する意識の変化、(3) 大都市と地方をめぐる状況、の3つについて整理します。

### (1) ICTをはじめとした技術の発展

既に何度も言及しているように、本書で紹介している新しい働き方や働く場所の登場には、ICTをはじめとした技術の発展が大前提となっています。技術の発展により時間や場所を選ばずに働くことが可能になったのです。

技術の発展は、これまでの仕事を時間や場所にとらわれずに行うことを可能にただけではなく、これまでにない仕事の進め方や、仕事を作り出したり獲得したりする方法を生み出しました。個人が情報にアクセスしたり情報を発信したりすることがきわめて簡単になりました。その結果、『週末起業』（藤井孝一著、筑摩書房、2003年）や『1万円起業』（クリス・ギボレー著、飛鳥新社、2013年）という言葉からもわかるように、これまでよりも圧倒的に少ない手間や費用で個人がビジネスをすることが可能になりました。商品・サービスの仕入や販売も簡単になり、ビジネスとまでするかはさておき、簡単に個人間で売り買いがなされるようになりました。形のある商品・サービスがなくても、ブログやYouTubeでコンテンツを発信して広告収入を得ることや、コンテンツそのものを直接販売することもできます。ランサーズやクラウドワークスに代表されるクラウドソーシングサイトで仕事を得ることもできます。

挙げればきりがありませんが、技術の発展によるこのような影響によって、働き方や働く場所が変化してきているのです。

### (2) キャリアや働くことに関する意識の変化

キャリアや働くことに関する意識の変化も見逃せません。リンダ・グラットン氏の『LIFE SHIFT』（東洋経済新報社、2016年）によって「人生100年時代」という言葉が世間でよく言われるようになりました。生きる時間が長くなったことによって、①学校で教育を受け、②会社などで仕事をし、③定年を迎えて引退する、という3つのステージを順番通りに歩む人生ではなくなり、マルチステージの人生へと移行（ライフ・シフト）することになりました。

一方で、会社に対する信頼も揺らいでいます。特に日本においては、戦後の高度成長期からバブル期にかけては、年功賃金、終身雇用、企業別組合を三種の神器とする日本型経営がもてはやされました。実態は少し違ったかもしれませんが、ひとつの会社で勤め上げることが美德とされました。自分のキャリアについて自分で選択をすることなく、会社に任せておけば大丈夫という雰囲気が（少なくともいまと比べれば）ありました。しかし、バブル崩壊から長きに渡る不況期を経て状況は一変しました。大企業の倒産も相次ぎ、年功賃金や終身雇用の崩壊が喧伝され、会社と従業員の間にこれまで存在した信頼関係はかなり弱まってしまい

ました。VUCA (Volatility, Uncertainty, Complexity, Ambiguity) という言葉も広まっていますが、ますます変化の激しい時代を迎え、人間の寿命が会社の寿命よりも長くなり、ひとつの会社だけでキャリアを終えることが非現実的だと思われるようになりました。

そうしたこともあって、「自分が本業と考える組織、あるいは役割に全面的に依存してしまい、その価値観を疑問の余地なく受け入れ、その状態から変化する可能性すら想定していない」シングルキャリアを歩むのではなく、「会社勤めなどの本業をしっかりと持ちながら、本業以外に社会活動を行う新しい生き方」であるパラレルキャリアが推奨されるようになりました（『時間と場所を選ばないパラレルキャリアを始めよう！』石山恒貴著、ダイヤモンド社、2015年）。二枚目の名刺を持つことが推奨されたり（「二枚目の名刺」という名称のNPO法人も存在します、<https://nimai.me.or.jp/>）、最近では、副業・複業という言葉もよく聞きますし、実際にこれまでは禁止されていた副業・複業が解禁される方向にあります。

こういったキャリアや働くことを取り巻く環境の変化やそれに伴う意識の変化もまた、新しい働き方や働く場所の登場の背景となっています。

### （3）大都市と地方をめぐる状況

大都市と地方をめぐる状況も、新しい働き方や働く場所が登場している背景です。かたや大都市に目を向けると、様々な問題が指摘される一方で、一向に東京への一極集中は解消されないようです。地方に目を向けると状況はさらに厳しいものです。増田寛也氏による『地方消滅』（中央公論新社、2014年）という本が話題になりましたが、日本全体の人口が減少する中で、地方の過疎は深刻なものとなっています。長きに渡り地域活性化や地方創生の取り組みがなされていますが、成功している地域もある一方で、多くの地域は苦境に立たされたままであるように思われます。そのような状況の中で、企業のオフィスを誘致することで、雇用を生み出したり、移住により人口を増やしたりできないかということが試みられています。あるいは、それらが難しければ、一時的にでも地域を訪れてもらい経済活動を行ってもらったり関係人口を増やしたりできないかということが模索されています。特に地方における新しい働き方や働く場所の登場の背景には、苦境に立たされている地方という側面もあるようです。

## 第3章 群馬県内のコワーキングスペース

第3章では、群馬県内にある16のコワーキングスペースを紹介します。すべてのコワーキングスペースを網羅しているリストやウェブサイトは存在しないので、2019年の間に確認できた群馬県内にあるすべてのコワーキングスペースを訪問してお話を伺わせてもらいました。確認の方法はウェブ上での検索です。主にGoogleを利用して「コワーキングスペース」という単語と、「群馬県」や群馬県内のすべての市町村および郡の名称を組み合わせて検索を行いました。また、コワーキングスペースの運営者同士のつながりもありますので、インタビューの際に群馬県内のコワーキングスペースについて情報共有させてもらいました。

ここで、コワーキングスペースとして取り上げるかどうかの条件は、①広い意味で働くための場所であること、②利用者間の交流が意図されていること、③利用者が固定的にならない仕組みとなっていること、の3つすべてを満たしていることです。この3つの条件を満たせば、自らコワーキングスペースと称していない場所でも取り上げています。

3つの条件そのものやその判断基準について説明を加えておきます。①でいう「働く」には、「広い意味で」ということで、お金を得るために行う仕事だけではなく、ボランティアで行う活動やキャリアのための自己啓発なども含まれます。②と③は、第1章で紹介したオープンな人的な交流というコワーキングスペースにおいて欠かせない要素に関わります。②については、ウェブサイトやパンフレットなどで利用者間の交流に触れられているかや、利用者間の交流のための空間やイベントが用意されていたりするかを判断基準としました。③については、多様な人がオープンに利用できるドロップインやフリーデスクの仕組みがあるかを判断基準としました。これらの条件の判断にあたっては、対象となる場所のウェブサイトやパンフレットの内容、および、観察やインタビューといった訪問調査をもとにしています。これらの条件によって、カフェやファミレスのような働くために用意されたわけではない場所、利用者間の交流のないブース型のスペースや自習室、利用者間の交流はあってもメンバーが固定的でオープンではないシェアオフィス、などが除外されます。

それでは、市町村別にコワーキングスペースを紹介していきます。概要、提供しているサービスおよび料金、設立の経緯や取り組みが中心です。紙幅の関係上、代表的なサービスおよび料金や設備のみ紹介しています。また、2020年2月までの情報に基づいていますので、現在の詳細情報を知りたい場合は各コワーキングスペースにお問い合わせください。

### (1) 高崎市のコワーキングスペース

#### ① Somethin' Else (<https://somethingelse.jp/>)

Somethin' Else (サムシングエルス) は、株式会社フェアマインド (代表取締役・

反保敏彦氏) が運営する高崎市小八木町 312-15 ビジネスパーク小八木 2 階にあるコワーキングスペースです (写真 3)。井野駅から徒歩で 20 分、高崎駅から車で 20 分に位置しており、駐車場も用意されています。Somethin' Else には「この上なく素晴らしいもの」という意味があり、人と人との出会いが新しい価値を生み出す「共創」の場として、地域に貢献できる共創スペースをめざしています。写真 4 にあるように内装は木製を基調としたリラックスできるデザインになっています。

写真 3 ビジネスパーク小八木



出典：筆者撮影

写真 4 Somethin' Else



出典：筆者撮影

Somethin' Else では、ドロップイン (250 円 / 1 時間、または、1,000 円 / 1 日)、および、月額契約のサービスを提供しています (バーチャルオフィス、フリーアドレス、固定席、個室)。また、1 階のセミナースペース (2,160 円 / 1 時間) と 2 階の 2 つの会議室 (1,250 円 / 1 時間) を利用できます。営業時間は、平日は 10 時 ~ 19 時、土日祝は 10 時 ~ 17 時です。個人から法人に至るまで利用されており、WordPress などの勉強会や子ども向けのロボットのプログラミングの教室といったイベントも定期的に開かれています。

Somethin' Else の運営が始まったのは、2013 年 7 月 1 日です。代表取締役の反保敏彦氏は東京都内の出版社で働いた後に、地元に戻ってきて 2013 年 4 月 18 日にシステム会社である株式会社フェアマインドを設立しました。当初は高崎駅に近いあら町に会社を構えていましたが、借りていた広めの事務所の使い切れないスペースを使って当時日本でも登場し始めていたコワーキングスペースを始めました。日々の業務を行うだけではなく新しいことや創造的なことに取り組まなければならないと考え、地方におけるコワーキングスペースに取り組んでいます。2017 年 2 月 1 日には、株式会社レンタルオフィスの金森知氏が運営していた「起業家の森」(2015 年 4 月から) というコワーキングスペースを引き継ぐ形で、現在の場所に会社および Somethin' Else を移転しました。

反保氏は小さくても構わないので何か新しいことを始めたい人と積極的に関わっていきたくて考えています。起業をしたい、フリーランスになりたい、ちょっとした商品を作って販売したい、などと思っても、誰に相談していいかわからない人の相談に乗っています。FAAVO 群馬 (<https://faavo.jp/gunma>) という地域のクラウドファンディングのエリアパートナーにもなっています。

## ② Spectrum Space (<https://spectrum-gunma.com/space/>)

Spectrum Space (スペクトラム スペース) は、グローリーハイグレイス有限会社(代表取締役・相京恵氏)が運営する高崎市栄町14-1 高崎イーストセンタービル3・4階にある貸し会議室およびコワーキングスペースです。高崎駅東口のデッキから直結している徒歩2分に位置しています。内装は一般的な会議室という雰囲気です。駅近くにあることやフリードリンクなどのサービスがあり、快適に利用できます。

Spectrum Space では、貸し会議室の提供が主で、会議室が空いている際にコワーキングスペースとしてドロップインで利用できます。10人から40人程度で利用できる大小4つの会議室があります(3,000～8,000円/1時間)。このうち最も大きいRoom 3Aが空いている場合に、コワーキングスペースとしてドロップイン利用(500円/2時間、または、1,000円/1日)ができます(写真5・6)。会議室は平日と土日祝のどちらも10時～21時で利用でき、コワーキングスペースの利用は平日の10時～18時です。駅に近い立地により貸し会議室は様々な形で利用されている一方で、コワーキングスペースとしての利用は必ずしも多くないようです。

写真5 Spectrum Space Room 3A



出典：筆者撮影

写真6 Spectrum Space Room 3A の  
会議室利用の様子



出典：筆者撮影

相京恵氏は、もともと高崎市の連雀町にある Gru (<https://gru-takasaki.com/>) というカフェ・レストランを2012年4月3日から運営しています。地域で若い世代が新しいことに取り組まなくてはならないという思いからです。その後、さらなる新たな取り組みとして Spectrum 事業部を2016年8月1日に設立しました。Spectrum 事業部では、上記の貸し会議室事業の他に、英語教育、外国人向け日本語教育、インバウンドを取り扱っています。Spectrum Space は2017年4月から運営を開始しています。さらに、同社の千明祐介氏らと一般社団法人ぐんまインバウンド協会を立ち上げています。いろいろな人が集まる場所や、英語を話せる日本人および海外の人が活躍できる仕事や環境といった、地域に足りないものを試行錯誤しながら提供しています。その活動が認められて、2018年5月には、経済産業省による「高度外国人材活躍企業50社」に認定されています。

### ③ タカサキチ (<http://gunmachiiiku.com/salon>)

タカサキチは、一般社団法人コトハバ（代表理事・都丸一昭氏）が運営する高崎市東町 266-4 にあるコワーキングスペースです（写真 7）。高崎駅東口から徒歩 10 分に位置しています。1961 年に建てられた空き家を改修し、白い壁と木を基調とした建物です。2015 年 3 月から無料で利用できる「子育てと両立できる働き方」を支援する子育てサロンとして運営を開始しています。

写真 7 タカサキチ



出典：筆者撮影

一般社団法人コトハバは「子育て期の応援」と「働き方改革推進」の地域拠点を運営する一般社団法人です。2014 年 12 月 11 日に一般社団法人ママプロぐんまとして設立され、2016 年 10 月 7 日に現在の名称に変更しています。コトハバという名称は、「子と母と場づくりを」から着想を得ています。代表理事の都丸一昭氏は、2011 年から子育て期の女性の支援事業に取り組んでいます。その中で、働き方、働く場所、キャリアといった働くことに関する問題に気づき、子育て期の女性の働くことに関する支援にも取り組み始めました。子育てと両立できる働き方としてのテレワーク推進、地域と都市を結ぶ地域ビジネス拠点の運営、ESG・SDGs 視点でのビジネス創業推進、が主要な事業です。群馬県高崎市だけではなく、同県のみなかがみ町や下仁田町、および長野県佐久市にも活動の場を広げており、本書でも後でみなかがみ町と下仁田町の拠点を紹介します。

タカサキチは、群馬県高崎市の平成 27 年度総務省ふるさとテレワーク実証事業にも関わっています。単に子どもと一緒に働ける場所を提供するだけではなく、教育・研修や仕事の紹介なども行う点に特色があります。現在は、株式会社 CRANE（代表取締役・安司寛太氏）が一室に入居しつつ、管理・運営に携わっています。

### ④ シェアオフィス ippo (<https://shimizu-shoji.com/lp/>)

シェアオフィス ippo（シェアオフィス イッポ）は、株式会社清水商事（代表取締役・清水正樹氏）が運営する高崎市問屋町西 1-1-3 にあるコワーキングスペースです（写真 8）。高崎駅から車で 10 分、高崎問屋町駅から徒歩 25 分に位置しています。写真 9 にあるように内装は木製を基調としています。

写真 8

シェアオフィス ippo 外観  
（株式会社清水商事）



出典：筆者撮影

シェアオフィス ippo では、主に月額契約のサービスを提供しています（フリーアドレス、固定席、個室）。また、1 階のユーティリティルーム（3,000 円 / 2 時間）も利用できます。高崎市内外の個人から法人まで、幅広い利用者がいます。

株式会社清水商事は、オフィス関連の商品を取り扱い各種提案やコンサルティングも行う会社です。1909年(明治42年)の創業であり、長く事業を行う中で自社オフィスの中であったスペースを有効活用するために、2015年1月15日にショールームを兼ねたシェアオフィス ippo の運営を開始しました。起業や新しい事業など何かを始める一歩目に役立ちたいという思いを込めて、また、株式会社清水商事にとっても新しい一歩を歩みだす事業であったということで、ippo という名前が付けられました。

写真9 シェアオフィス ippo 2階



出典：筆者撮影

当初は2階建ての建物の1階のみでしたが、利用者がいることがわかったため、現在では2階まで拡張し、サービスや機能を拡充しています。県内の車の交通の便を考えると優れた立地でもあります。清水氏は、問屋町の周辺には同様にオフィスのスペースをあまらせている会社があり、一方でオフィススペースを利用したい人がいるので、そのマッチングをどうにかしてできないかと考えているそうです。

#### ⑤ Office TAKASAKI BASE (<https://takasakioffice.com/>)

Office TAKASAKI BASE (オフィス タカサキ ベース) は、高崎ターミナルビル株式会社(代表取締役・丸山勝氏)とジーイーエム株式会社(代表取締役・川岸勝氏)が運営する高崎市八島町222番地イーサイト高崎2階にあるコワーキングスペースです(写真10)。高崎駅の改札から徒歩1分という抜群の立地にもかかわらず、十分な広さがあります(写真11)。

写真10 Office TAKASAKI BASE 外観



出典：筆者撮影

写真11 Office TAKASAKI BASE 内部



出典：筆者撮影

Office TAKASAKI BASEでは、ドロップイン(300円/30分, 500円/1時間, 2,000円/1日)、および、月額契約のサービスを提供しています(フリーアドレス)。また、中にある会議室の利用やOffice TAKASAKI BASE全体の貸し切り利用もできます。営業時間は、平日は12時~21時、土日祝は10時~19時です。運営に携わるジーイーエム株式会社が同じイーサイト高崎内で運営する 아이폰修理店「スマコレイサイト高崎店」で受付を行っています。

Office TAKASAKI BASE ができたきっかけは、現在入居している場所が空いた際、高崎ターミナルビル株式会社の丸山社長がコワーキングスペースをできないかと考えたことです。スマコレイサイト高崎店を出店しているジーイーエム株式会社が、熊谷にある本社で熊谷レンタルオフィスというコワーキングスペースを運営していることから、2019年1月からOffice TAKASAKI BASEの運営が開始されました。運営開始から時間もそれほど経っておらずレイアウトやサービスについて試行錯誤の状態ですが、現在はコワーキングスペースとしての利用よりも、会議室や貸し切りによる幅広い目的での利用が多い状況のようです。

## ⑥ TREE 高崎 (<https://tree.lala.co.jp/>)

TREE 高崎（ツリー高崎）は、ララハウス株式会社（代表取締役・吉田広宣氏）が運営する高崎市連雀町104 スズメビルディング 2・3階にあるコワーキングスペースです（写真12）。高崎駅から徒歩8分に位置しています。名前からもわかるように内装は木製を基調としています（写真13）。2階がコワーキングスペース、3階がシェアオフィスとなっています。

### 写真12 TREE 高崎外観（スズメビルディング） 写真13 TREE 高崎 2階 コワーキングスペース



出典：ララハウス株式会社提供



出典：筆者撮影

TREE 高崎では、ドロップイン（500円／1時間、または、2,000円／1日で、半額程度の学割料金もあります）、および、月額契約のサービスを提供しています（フリーアドレス、固定席、個室）。また、2階のミーティングルーム、ギャラリー、フリースペースの貸し切り、3階の3つの会議室の利用ができます。2階のコワーキングスペース営業時間は、平日は9時～22時、土日祝は9時～20時です。3階のシェアオフィスは、全日7時～24時までが営業時間です。

TREE 高崎があるスズメビルディングはララハウス株式会社が保有するビルです。もともとはテナントが入っていましたが、2・3階のテナントが空いた際に、吉田氏がとある本で読んでコワーキングスペースやシェアオフィスを運営したいと考えたことがきっかけで、2019年5月から運営を開始しています。運営開始から日が浅く手探りの状態ですが、2階で様々なイベントが開催されたり、徐々に3階のシェアオフィスも埋まってきていたりという状態のようです。

## (2) 前橋市のワーキングスペース

### ① 田舎フェ (<https://www.brain-f.com/inacafe/>)

田舎フェ(イナカフェ)は、株式会社ブレインファーム(代表取締役・龍野正孝氏)が運営する前橋市千代田町5丁目13-9にあるワーキングスペースです(写真14)。前橋駅から徒歩12分、中央前橋駅から徒歩3分に位置しています。オレンジとグリーンを基調にした色合いや壁一面のホワイトボードが特徴的です(写真15)。

写真14 田舎フェ外観



出典：筆者撮影

写真15 田舎フェ内部



出典：筆者撮影

田舎フェでは、ドロップイン(500円/2時間、または、1,000円/1日)、および、月額契約のサービスを提供しています(フリーアドレス)。講座・イベントや貸し切りでの利用もできます。営業時間は、平日の10時～19時です。シェアオフィスのツムグ前橋やシェアハウスのリバ邸前橋などの関連施設も近くに存在しています。

龍野氏が取り組むCross-i Project(<https://www.cross-i.net/>)の一環として、田舎フェは2013年10月に運営を開始しました。Cross-i Projectとは、「ワーキングスペースで交流を促進し、スマートデバイスアプリ開発者の育成で、群馬県内ICT教育環境を整え、開発者と発注者をつなぐマッチングビジネスを進めるとともに、県内へのサテライトオフィス・サポートセンターの誘致を計り、雇用の創出、産業の活性化を目指す」ものです。龍野氏はしばらく一人でIT関連の仕事をしていたものの、東日本大震災を契機に地域にも関わるような取り組みを始め、非営利活動法人ブレインファームを設立しました。スマホの使い方を高齢者に教えたり、プログラミングの教室や勉強会を開いたり、関連施設の運営にも関わりながら、前橋を盛り上げようとしています。

### ② comm (<https://www.comm-maebashi.com/>)

comm(コム)は、一般社団法人前橋まちなかエージェンシー(代表理事・橋本薫氏)が運営する前橋市千代田町2-10-2にあるワーキングスペースです(写真16)。前橋駅から徒歩15分、中央前橋駅から徒歩10分に位置しています。以前は新星堂という音楽関連チェーン店が入居していた地下1階から4階まである空きビルを改装し、「Where good things grow.」というコピーを掲げて2018年8

月から運営を開始しています。

写真 16 comm



出典：橋本薫氏提供

写真 17 comm 3階会議室スペース



出典：橋本薫氏提供

comm は、地下1階がスタジオ・スペース、1階がトライアル・ショップ・スペース、2階がシェアオフィス、3階が会議室スペース（写真 17）、4階が未利用となっています。2階や3階はコワーキングスペースやシェアオフィスとして、月額や年額の契約でサービスを提供しています（フリーアドレス、固定席）。また、その他のスペースも月額で利用することができます。営業時間は、平日9時～20時です。一般財団法人田中仁財団が主催する群馬イノベーションスクールの開催場所となっています。また、本書でも紹介した Spectrum もメンバーとして参加しています。

comm は、一般社団法人前橋まちなかエージェンシー (<https://www.machinaka.agency/>) の活動拠点のひとつです。前橋のまちなかの活性化に取り組む中で、シェアオフィスの Frasco や前橋まちなか研究室よりも大きい多くの人が利用できる場所として comm は作られました。Community, Communication, Common, Commitment といった、「つながり」を想起させる「comm」という接頭辞から名称が付けられています。前橋ビジョンである「めぶく。」を体現した、良いものを育てる場所とされています。

### ③ Creative Cabin ([https://peraichi.com/landing\\_pages/view/kxpqn](https://peraichi.com/landing_pages/view/kxpqn))

Creative Cabin (クリエイティブ キャビン) は、荒井会計事務所が運営する前橋市天川原町1-2-18 クレストビル2階にあるコワーキングスペースです（写真 18・19）。前橋駅から徒歩15分に位置しています。

Creative Cabin では、ドロップイン（550円／1時間）、および、月額契約のサービスを提供しています（フリーアドレス）。また、貸し切り（3,850円／1時間）での利用もできます。ドロップインや貸し切りについては、営業時間は平日の10時～17時前後となっています。

写真 18 Creative Cabin 外観  
(荒井会計事務所)



出典：筆者撮影

写真 19 Creative Cabin



出典：豊田啓彰氏提供

Creative Cabin の企画・運営は、荒井会計事務所の経営企画室室長の豊田啓彰氏が行っています。もともと荒井会計事務所が入居しているクレストビルの、別テナントが入居していた2階の部屋が空いたことをきっかけに、2018年8月にCreative Cabinの運営を開始しました。会計事務所の業務である専門性を用いた起業支援をできる場所として開始しました。入居者が成長すれば荒井会計事務所の優良な顧客にもなってくれますし、様々な情報を持ち込んでくれます。

### (3) 桐生市のコワーキングスペース

#### ① COCOTOMO (<http://kids-valley.org/cocotomo/>)

COCOTOMO (コトモ) は、特定非営利活動法人キッズバレイ (代表理事・星野麻実氏) が運営する桐生市本町5-51 東武桐生ビル1階にあるコワーキングスペース兼コミュニティスペースです (写真20・21)。桐生駅から徒歩9分に位置しています。同じビルの2階と3階には公益財団法人桐生地域地場産業振興センターの運営する桐生市インキュベーションオフィスがあります。

写真 20 COCOTOMO 外観



出典：特定非営利活動法人キッズバレイ提供

写真 21 COCOTOMO 内部



出典：特定非営利活動法人キッズバレイ提供

COCOTOMO では、ドロップイン (330 円 / 1 時間, 550 円 / 3 時間, 1,100 円 / 1 日), および, 月額契約のサービスを提供しています (フリーアドレス)。また, テーブル, キッズスペースでもあるフローリングスペース, 会議室という単位で利用できるほか, 貸し切り (半面, 全面) での利用もできます。営業時

間は10時～17時で、全面貸し切りでの利用の場合のみ18時～21時で利用できます。地域の商品の販売を行っている点や、授乳室やおむつ替え台を備えている点が特色です。①学生の勉強の場、②フリーランスの仕事の場、③場所を借りての様々な利用、が主な利用目的です。

2013年11月に設立された特定非営利活動法人キッズバレイは、若者・子育て世代の「くらし」と「仕事」を支援し、地域経済の活性化を目指しています。ビジョンとして「子どもたちに誇れる地域の未来をつくる」、ミッションとして「子育て世代がいきいきと暮らし、働くことのできる地域の実現」と「サステナブルな地域経済の実現」を掲げています。COCOTOMOの運営のほかに、きりゅうアフタースクール事業、ままのWAきりゅう事業、ビジネス支援事業、ポータルサイト「おやここ」運営事業、などを行っています。以前は東武デパートも入っていた東武桐生ビルですが、行政・商店街・NPOが連携し、2015年3月に空き店舗を改装してコワーキングスペースとしての運営を開始しました。現在では、様々な地域の活動が行われる場として定着しています。

#### (4) 太田市のコワーキングスペース

##### ① エールクリエイティブ (<https://yellcreative.net/>)

エールクリエイティブは、株式会社エールクリエイティブ(代表取締役・藤枝哲哉氏)が運営する太田市東本町28-1にあるコワーキングスペースです。太田駅から徒歩5分に位置しています(写真22・23)。理念として「One for All, All for One(一人はみんなのために、みんなはひとりのために)」を掲げていて、「受容と寛容の共生社会」や「競争ではなく協働・共創の新しい働き方」を目指しています。

写真22 エールクリエイティブ外観



出典：筆者撮影

写真23 エールクリエイティブ内部



出典：筆者撮影

エールクリエイティブでは、ドロップイン(500円/3時間)、および、月額契約のサービス(フリーアドレス)、貸し切り利用(8,000円/3時間)などを提供しています。営業時間は、平日は11時～19時(火曜定休)、土日祝は13時～18時です。藤枝氏の特技を活かして、単にコワーキングスペースとして運営しているだけでなく、ウェブ、プログラミング、デザインなどITを中心に幅広いサービスを提供していたり、ハンドメイド作家を応援して店舗やウェブでの

委託販売を実施していたり、地域貢献のための様々な活動を行っていたりする点に特色があります。設備としても3Dプリンターやレーザーカッターを備えています。また、交流会であるエールの会や、ハンドメイド雑貨のワークショップなども開催されています。

藤枝氏は太田市出身であり、東京で働いた後に太田市に戻ってきて、しばらくしてIT系のフリーランスとして独立しました。そして、2013年5月にエールクリエイティブの運営を開始しました。同時期にできた群馬県内のコワーキングスペースとも交流を持ちつつ、試行錯誤をしながら活動を続けてきました。次第にITの分野やハンドメイドの分野を中心に地域での活動を活発に幅広く行うようになりました。

## ② Miraice (<https://otawomen.localinfo.jp/posts/6501104/>)

Miraice（ミライス）は、太田市役所および一般社団法人なでしこ未来塾が運営する太田市吉沢町1058-5にある太田市産業支援センター2階の太田CSVセンター204号室にあるコワーキングスペースです（写真24）。太田駅から車で15分に位置しています。

写真 24 Miraice



出典：筆者撮影

Miraiceは、太田市の平成29年度総務省ふるさとテレワーク推進事業の一環で設立されました。太田市役所の委託を受けて一般社団法人なでしこ未来塾が運営する、無料で利用できるスペースです。営業時間は平日の10時～16時です。

一般社団法人なでしこ未来塾は、おおたなでしこ未来塾の卒業生である個人事業主が集まって作られた団体です。おおたなでしこ未来塾とは、群馬県太田市が主催する、起業に興味がある、もしくは、すでに起業している女性向けの創業塾です。2015年度から開始され、2019年度で5期になります。毎年10名前後の参加者があり、その卒業生の集まりとして一般社団法人なでしこ未来塾が設立されました。Miraiceはおおたなでしこ未来塾の会場としても利用されています。

## ③ 勉強カフェライアンスぐんま太田スタジオ

(<https://benkyo-cafe.com/gunma-ota/>)

勉強カフェライアンスぐんま太田スタジオ（以下、勉強カフェ太田スタジオ）は、太田市飯田町753にある勉強カフェのフランチャイズで、オーナーは清水朋子氏です（写真25）。太田駅から徒歩15分に位置しています。勉強カフェは株式会社ブックマークスが運営する勉強する大人のための空間です。コワーキングスペースというよりも自習室に近いイメージを持たれるかもしれませんが、大人の勉強である自己啓発も広く働くことに含めること、実際には勉強ではなく仕事をする利用者もいること、利用者間の交流が意図されていることから、ここで紹

介します。

写真 25 勉強カフェ太田スタジオ外観



出典：清水朋子氏提供

写真 26

勉強カフェ太田スタジオ内部



出典：清水朋子氏提供

勉強カフェ太田スタジオは、月額で利用するのが基本ですが、ドロップイン(500円／1時間, 2,000円／1日)での利用もできます。1階のセミナールーム(3,000円／1時間, 7,000円／3時間)や2階のミーティングルーム(2,000円／1時間, 5,000円／3時間)も利用できます。個人会員のほかに法人会員の制度もあります。営業時間は、平日は8時～22時半, 土曜は9時～21時, 日祝は9時～20時, です。単なる自習室とは大きく様子が異なり、フリードリンクや多種多様な空間が用意されており、個人の状況に合わせて快適に利用できます(写真26)。また、イベントやセミナーも開催されています。

オーナーの清水氏は、太田市にこれまではなかった自分がそこで過ごしたいと思える施設として、勉強カフェ太田スタジオを作りました。長く東京で働いてから出身地の太田市に戻ってきた清水氏は、自分が過ごしたいと思えるような場所が太田市にはほとんど存在しないことに気づきました。そこで、そこにいる自分が好きになれるような、そこにいることでモチベーションが上がるような場所を作りたいと考えました。そんな折に、出張先で勉強カフェ名古屋グローバルゲートスタジオを見て、自分が作りたいと思っていた場所が既にあることを知りました。翌日には、勉強カフェを運営する株式会社ブックマークスの代表取締役である山村宙史氏に会いに行き、太田市でフランチャイズを設立することを認めてもらいました。フランチャイズは、運営ノウハウ、システム、スタッフ教育などを活用できる点で、ゼロから自分で始めるよりもよいと考えたそうです。

実家の所有していた土地に新しく建物を建て2019年1月26日に運営を開始して以来、順調に利用は伸びているようです。市内の大人を中心に、市外の人や学生まで幅広く利用されているようです。清水氏と同じニーズを持っていた人は少なくなかったようで、様々なイベントやセミナーを開催する場所としても利用されているようです。

## (5) 伊勢崎市のコワーキングスペース

### ① コモンツナトリ (<http://josyu-yamorisha.co.jp/>)

コモンツナトリは、合同会社上州家守舎が運営する群馬県伊勢崎市連取町3077-5にあるシェアスペースであり、コワーキングスペースとしても利用可能です(写真27)。伊勢崎駅から車で10分に位置しています。もとは東京競馬所有の寮であった2階建ての建物である連取荘を改修したものです。

写真27 コモンツナトリ外観



出典：筆者撮影

写真28 コモンツナトリ内部



出典：筆者撮影

コモンツナトリでは、建物の一部はシェアオフィス、それ以外の部分は多目的に利用できるレンタルスペースとなっています。シェアオフィスは、1階と2階で合計6部屋あり、それぞれの部屋がそれぞれのオフィスとして利用されています。レンタルスペースは、1階にコモンスペース(写真28)とレンタルキッチンがあり、2階に4つの部屋があります。レンタルキッチンは1時間1,500円、2階の各部屋は1時間1,000円で借りられます。どちらも1日貸し切りが10,000円です。また、月額個室利用では、コモンスペースの利用、平日のみや週末のみの利用、法人登記も可能であり、用途にあわせた利用が可能です。レンタルスペースは、当初は月額利用のみでしたが、要望や利用実態に応じて2019年6月から時間利用を導入しました。

コモンツナトリは、伊勢崎にコミュニティスペースがないことに問題を感じた伊勢崎の3社の社長達が2018年6月から運営を開始したものです。リノベーションスクールに参加した仲間がいたことから、彼らの使う家守という言葉を使って合同会社上州家守舎という名前をつけています。しかし、なかなか利用者の数は伸びませんでした。そこで、伊勢崎で2015年4月からまきばプロジェクト(<https://makiba.life/>)という地域づくりの活動に取り組んでいる秋山麻紀氏に運営を依頼しました。

秋山氏は、利用者がコモンツナトリをどう使えばいいかわからなかったと考え、自らの活動で構築した人脈も活かし、見学会や使い方の提案を積極的に行うようにしました。女性向けの美と健康をテーマとした「アフロディーテ」、あかぎ信用組合が主催する創業したい人に向けた「創業學舎」などのイベントを開催するなど、利用方法も含めた認知を高める取り組みをしている最中です。

## (6) みなかみ町のコワーキングスペース

### ① テレワークセンター MINAKAMI (<https://tw-g.org/minakami/>)

テレワークセンター MINAKAMI (テレワークセンター ミナカミ) は、一般社団法人コトハバが運営する利根郡みなかみ町月夜野 3273-2 にあるコワーキングスペースです (写真 29)。最寄駅のひとつは、東京駅から新幹線で 66 分の上毛高原駅です。上毛高原駅から車で 5 分、徒歩で 25 分に位置しています。みなかみ町は、豊かな山岳や河川といった自然環境に囲まれており、18 の温泉があります。都会を離れて、働くことと同時に、豊かな自然環境を満喫できます。

写真 29 テレワークセンター MINAKAMI



出典：筆者撮影

写真 30 テレワークセンター  
MINAKAMI 「みなかみ」



出典：筆者撮影

ももとは月夜野幼稚園であった 2 階建ての建物に 8 つのオフィスと 1 つのオープンスペースがあります。8 つのオフィスのうちのひとつの「つきよの」には、一般社団法人コトハバが入居しています。もうひとつの「みなかみ」はスポット利用 (1,000 円 / 1 席 1 日、または、4,500 円 / 1 日 1 室) できます (写真 30)。その他の 6 つのオフィスは月額で借りることができ、現在はほぼ埋まっている状態です。オープンスペース「たにがわ」は 1 時間 8,000 円で利用できます。コワーキングスペースやシェアオフィスとしての利用はもちろん、経営合宿やワークショップといったイベントでも利用されています。営業時間は、平日は 10 時～20 時、土日祝は 10 時～16 時です。

一般社団法人コトハバの都丸氏は、みなかみ町から相談があり、テレワークセンター MINAKAMI に携わることになりました。平成 28 年度総務省ふるさとテレワーク推進事業および平成 29 年度総務省お試しサテライトオフィス事業の推進団体となり、廃園した直後の月夜野幼稚園の利用方法がなかったため、2017 年 3 月からテレワークセンター MINAKAMI として運営することができました。2017 年度の利用者ののべ人数は 659 人で、うち宿泊者数は 276 人でした。また、同じみなかみ町で 1 日 1 組が利用できる WIND + HORN (ウィンド アンド ホルン) というリモートワーク施設の運営も行っています (利根郡みなかみ町上牧 2230-1, <https://www.windandhorn.com/>)。

## (7) 下仁田町のワークキングスペース

### ① 下仁田町テレワークオフィス (<https://shimonita.work/>)

下仁田町テレワークオフィスは、一般社団法人コトハバが運営する甘楽郡下仁田町下仁田 202 にあるワークキングスペースです（写真 31・32）。下仁田駅から徒歩 5 分に位置しています。練馬インターから車で 1 時間程度と、東京方面からのアクセスも良いです。豊かな自然環境に囲まれているだけでなく、下仁田駅周辺に拠点がまとまっており過ごしやすい環境になっています。

写真 31 下仁田町テレワークオフィス外観 写真 32 下仁田町テレワークオフィス内部



出典：筆者撮影



出典：筆者撮影

下仁田町テレワークオフィスでは、ドロップイン（1,000 円／1 日）、および、月額契約のサービスを提供しています（フリーアドレス、固定席、個室）。また、会議室（1,000 円／1 時間）や貸し切り（8,000 円／1 時間）の利用もできます。ドロップインの利用可能時間は 10 時～17 時です。

一般社団法人コトハバの都丸氏は、テレワークセンター MINAKAMI の場合と同じく、下仁田町から相談があり、下仁田町テレワークオフィスに携わることになりました。蔵のような外観の建物を市役所の近くに新築し、2018 年 9 月 9 日から下仁田町テレワークオフィスの運営を開始しています。

## 第4章 県外・海外のコワーキングスペース

第4章では、県外および海外のスペースを3つ紹介します。ひとつは隣県の長野県上水内郡信濃町にある信濃町Nomad Work Centerです。法人向けの貸し切り型の施設であるため、本書のコワーキングスペースの定義にはあてはまりませんが、新しい働き方、中でもテレワークやワーケーションを考える際に参考になる先進的な事例です。残りの2つは、海外で運営されている日本企業が携わっているコワーキングスペースです。中国・上海とシンガポールという海外の大都市に位置していて、ここまでに登場しているコワーキングスペースとは性格が異なりますが、世界的な動向を感じてもらうために紹介します。なお、第3章と同じくこれらの事例も2019年に訪問してお話を伺わせてもらっています。

### (1) 信濃町Nomad Work Center (<https://nwc.natureservice.jp/>)

信濃町Nomad Work Center (シナノマチ ノマド ワーク センター) は、特定非営利活動法人 Nature Service (共同代表理事・赤堀哲也氏) が運営する長野県上水内郡信濃町野尻 1200-45 にあるリモートワーク施設です (写真 33・34)。黒姫駅および妙高高原駅から車で 10 分程度のやすらぎの森オートキャンプ場の敷地内に位置しています。黒姫高原・妙高高原や野尻湖といった豊かな自然に囲まれています。

写真 33 信濃町Nomad Work Center 外観



出典：赤堀哲也氏提供

写真 34 信濃町Nomad Work Center 内部



出典：赤堀哲也氏提供

法人向けの貸し切り型の施設であるため、本書のコワーキングスペースの定義にはあてはまりませんが、2019年5月に運営を開始したばかりの新しい働き方考える際に参考になる先進的な事例です。「私たちは、自然の中でだって働ける」というコンセプトで、自然がもたらす生産性向上や健康への効果を掲げています。基本プランとしてアクティビティプランと農業体験プランがあり、アクティビティとしては、森林セラピー、カヤック&SUP、バスフィッシング、トレッキング、ヨガ、キャンプなどが用意されています。ウェブページに記載されている参考価格は、30名で貸し切り利用する場合は5日間300,000円、または、7日間500,000円となっています。また、1日のみの施設利用は人数や時間を問わずに100,000円です。基本的には法人向けの貸し切り型の施設ですが、2019年のゴー

ルデンウィークやシルバーウィークには個人向けの無料開放も行っていました。

信濃町 Nomad Work Center のもうひとつの特徴は、3Dプリンター、オシロスコープ、レーザーカッター、3D スキャナーといった様々な工作機械や試験機があるメイクラボや、都会では不可能なドローンや自動走行車を実際に動かせる実証実験フィールドを備えていることです。先端技術分野である IT やロボティクス産業に関する取り組みにも対応できる施設となっています。

## (2) 匠新・XNode (中国・上海, <http://www.takumi.ltd/>)

中国・上海にある、匠新（ジャンシン）およびXNodeが運営する起業や新規事業といったスタートアップやイノベーションを支援するコワーキングスペースを紹介します（写真35）。匠新もXNodeも共にスタートアップやイノベーションを支援するプラットフォーム、あるいは、アクセラレーターと呼ばれるものです。XNodeは現地中国人が創業して中国で国際的に活動するアクセラレーターで、様々な国と中国を結び付けています。日本に関しては、XNodeも出資している匠新と提携して活動を行っています。

写真 35 匠新・XNode



出典：田中年一氏提供

匠新は日本人である田中年一氏が創業した日中間での事業共創を推進するアクセラレーターで、上海を主な拠点としています。株主でもあるXNodeの有するコワーキングスペースや様々なリソースを組み合わせ、日中それぞれの大企業・ベンチャー企業を結びつけ、事業を成功させるための様々なサービスを提供しています。2015年に上海で立ち上げられ、2018年には中国・深圳と日本・東京にも拠点を設立しています。中国法人は、匠技新（上海）創業孵化器管理有限公司であり、上海市静安区延安西路129号華僑大厦5階に位置しており、ここに運営するコワーキングスペースもあります。日本法人は、ジャンシン・ジャパン株式会社という名称です。

これまでに多くの、日系ベンチャー企業の中国スタートアップや、日系大企業による中国のスタートアップ企業と協力してのイノベーションや新規事業開発を、JETRO（独立行政法人日本貿易振興機構）とも連携しながら支援しています。日系ベンチャー企業に対しては、中国における資金調達やパートナー開拓、人材発掘、製造、販売、メディア露出、マーケティング、法務、税務、会計といった幅広いサービスをワンストップで提供しています。日系大企業に対しては、①中国の双創（中国語で「創新＝イノベーション」と「創業＝スタートアップ」の総称）の状況に対する理解を深める、②中国現地にイノベーション拠点を設置する、③中国のスタートアップ企業やテック企業と接触する、④中国のエコシステムを活用して行動する、といった段階に応じたサービスを提供しています。

東京も含めた国際的な大都市では、このようにグローバルなスタートアップやイノベーションの創出の場として、コワーキングスペースが活用されています。

### (3) クロスコープ・シンガポール (<https://crosscoop.com/office/singapore>)

クロスコープ・シンガポールは、ソーシャルワイヤー株式会社が運営する 80 Robinson Road の 10 階と 18 階にある日系のコワーキングスペースです（写真 36）。Telok Ayer 駅、Raffles Place 駅、Tanjong Pagar 駅に囲まれた中心業務地区（CBD: Central Business District）に位置しています。クロスコープは、主に東京を中心とした国内に加えて、シンガポール、タイ・バンコク、インドネシア・ジャカルタ、インド・デリー、ベトナム・ホーチミン、フィリピン・マニラといったアジア各国の主要都市で日本語対応可能な施設を展開し、日本企業の海外進出・国際展開を支援しています。

写真 36 クロスコープ・シンガポール



出典：クロスコープ・シンガポール提供

クロスコープ・シンガポールは、主にシンガポールに進出する日本企業を対象としており、2011年7月の運営開始以来、累計600社以上の企業に利用されています。月額契約のサービスの提供（バーチャルオフィス、フリーアドレス、固定席、個室）に加えて1日15シンガポール・ドルのコワーキングスペース利用のサービスも提供しています。個室は1～2名向けのものから、最大18名向けのものまでが用意されています。

運営開始から個室を中心とした日本企業向けシェアオフィスとして営業してきましたが、2019年2月に入居者へのサービスを充実させるため、改装してコワーキングスペースを構えました。その背景には、個室や決められた席などの場所にとらわれず働くという新しい働き方の概念がシンガポールでも浸透し始め、コワーキングスペースがあることがシェアオフィスとして一般的になってきたことがあります。コワーキングスペースでは、働く際の様々なモードに対応して、集中して仕事ができるブース、コラボレーションや学習の場といった交流ができるスペース、リフレッシュできるマッサージチェアなどが用意されています。海外においても働き方や働く場所の変化があることがわかります。

## 第5章 地方における働き方と働く場所

第5章では、地方における働き方と働く場所について、これまで見てきた主に群馬県内のコワーキングスペースの事例からわかることを簡単にまとめたいと思います。

まず、群馬県内の16のコワーキングスペースの概要について整理します。群馬県内では2013年頃に最初のコワーキングスペースができて始めました。働き方改革、テレワーク、ワーケーションなどの言葉の登場もあってか、最近になって再びコワーキングスペースが増えているようです。もちろん、本書で紹介しているのは現存しているコワーキングスペースであり、群馬県内でこれまでに作られて無くなっていった事例は、私が知っているだけでも少なくありません。そして、第3章で見たように16のコワーキングスペースは、その形態や提供するサービス、設立の経緯や動機、運営主体、などといった点で多様なものでした。ですので、16の事例を簡単にまとめることは難しいのですが、群馬県内の働き方や働く場所について下記の4点を指摘したいと思います。

第一に、地方のコワーキングスペースの収益性は決して高くないということが指摘できます。第3章で取り上げた事例のほとんども、あるいは群馬県以外のコワーキングスペースを見てみても、コワーキングスペースが単体で利益を挙げている例は稀です。基本的には他の収益源があって、(場合によっては他の仕事とのシナジー効果を見込んで)それと一緒にコワーキングスペースを運営している事例がほとんどです。あまったオフィススペースや空き家を利用してコワーキングスペースに取り組むという事例も少なくありません。ただし、群馬県内の16の事例のうち、空きスペースや空き家が設立のきっかけとなった事例は多いものの(9事例)、収益性を求めてというよりも運営者のコワーキングスペースに対する関心・熱意や、まちづくりのためを含めたひとつの試みとして運営が開始されたものがほとんどでした。

地方のコワーキングスペースの収益性が低い理由としては(大都市でも収益性が高いとは限りませんが)、利用者となる人口がそもそも少ないこと、加えてコワーキングスペースを利用するような働き方をする層が少ないこと、コワーキングスペースというものの認知が低いこと、などが指摘できます。また、大都市と比べて地方ではもともと土地や建物といった不動産にかかる費用が少ないので、スペースをシェアして費用を低減するメリットが小さいのかもしれませんが。

一方で、人口が少ない地方でもコワーキングスペースが成り立つのではないかという事例もあります。滋賀県湖南市で今プラスというコワーキングスペースを運営する中野龍馬氏が書いた『地方でコワーキングスペースは成り立ちますか?: 市内人口50,000人・駅乗車数2000人の街での挑戦』(Kindleダイレクト・ペブリッシング, 2018年)には、サブタイトルにあるとおり人口の少ない地方でコワーキングスペースを採算にのせるに至った運営ノウハウや具体的な収益・費用の数字などが掲載されており、大変参考になります。運営当初から黒字になることは難しくても、小さく始めることや車社会であっても駅近くの立地が大事であるこ

となどの指摘を守り、創意工夫を凝らせば、そこまで長い期間をかけずとも採算に乗せることはできるのかもしれませんが。

第二に、ほとんどの事例でまちづくりや地域のことが意識されていたことが指摘できます。最初からまちづくりや地域のことを考えてコワーキングスペースを始めた事例もあれば、コワーキングスペースを始めてからまちづくりや地域のことを意識するようになった事例もあります。理由は定かではありませんが、コワーキングスペースの利用者の交流というコミュニティ的な要素、収益性が低い分それ以外に取り組む理由が必要であること、そもそも地方で何かしらの場所に関する取り組みをすれば必然的にまちづくりや地域のことを意識せざるをえないこと、などといった理由が考えられます。地方でコワーキングスペースを運営する場合には、大都市で活動する以上にまちづくりや地域との関わりに注意しなければならないかもしれません。

第三に、地方のコワーキングスペースは大都市に比べてもまだまだ試行錯誤や実験の段階にあるということが指摘できます。群馬県内のコワーキングスペースの運営期間は、長くて7年弱で、作られて1年～2年程度のコワーキングスペースも少なくありません。そして、運営期間の長短を問わず多くの運営者が地方でのコワーキングスペースの運営について試行錯誤や実験をしている段階だと話しています。運営者をはじめとした様々な関係者の期待を集める一方で、そもそも『地方でコワーキングスペースは成り立ちますか？』（前掲書）という段階から模索がなされているのが現状です。テレワークやワーケーションといった新しい働き方自体が導入段階にあることも一因でしょう。また、地方にあるコワーキングスペースが、地域に対してどのように関わっていくのかということも、各地域の事情にあわせて模索されているようです。

第四に、地方のコワーキングスペースに対して求められるものが大都市部と異なることも指摘できます。本書で取り上げた事例を詳細に見ると、より快適なスペースを求めるニーズは確かにあるように思われます。ただし、現状では、会議室やスペースを貸し切って何らかの目的で利用するというニーズが多く、月額での個室のシェアオフィスの利用が次に多く、ドロップインで利用されることは少ないようです。多様なコワーキングスペースの利用者を一括して語ることはできませんし、正確なデータを得ているわけではありませんが、シェアオフィスに関しては一部でサテライトオフィスとしての利用が見られるものの、周辺で働いている個人・法人や地域住民による利用が大半を占めているようです。駅近くの立地であっても、出張者による利用はそれほど多くはないようです。その点では、地方のコワーキングスペースに期待される役割のうち、地域の内外を結びついたり、地域での経済活動や関係人口を増やしたり、といった役割はまだ十分に果たせていないかもしれません。

また、本書では海外の事例で紹介した大都市における華々しい、具体的には飛躍的なイノベーションや新規事業を発生させたり、グローバルな海外展開に関わっていたりというようなコワーキングスペースは、多くの地方にはそぐわないことが予想されます。あまりにも先進的なスペースでは地方の人たちは落ち着け

ないのではないかと言う運営者もいました。

以上の4点を振り返ると、コワーキングスペースのような新しい働く場所は登場してきていても、そのような場所を利用するような新しい働き方はまだまだ浸透していないのかもしれない。また、地方においては大都市部とは異なるニーズや役割があるようです。とはいえ、今後、地方でも新しい働き方や働く場所が浸透していくことが予想されます。特に、2020年の東京五輪の開催や2020年初頭から猛威を振るっている新型コロナウイルスの影響によって一層テレワークが推進・実施されていくことが予想されるため、一気に環境が整備され新しい働き方や働く場所の浸透が進む可能性もあります。

## 終章 おわりに：現状の記録とキャリアのヒント

最後に、①現状の記録と②キャリアのヒントという、本書の背後にある2つの目的を記しておわりにしたいと思います。

ひとつ目の目的は、群馬県内を中心としたコワーキングスペースについて現状を記録することです。これには、(A) コワーキングスペースの潜在的な利用者に情報を提供し利用を促すことと、(B) 現時点における群馬県内の取り組みを記録することという2つの意味があります。

本書によって群馬県内のコワーキングスペースを一覧できるようになれば、コワーキングスペースを利用したいと考える潜在的な利用者にとって有益な情報が提供され、利用を促せると考えています。第3章の冒頭でも触れていますが、すべてのコワーキングスペースを網羅しているリストやウェブサイトは存在しません。一般社団法人コワーキングスペース協会やコワーキング協同組合といった業界団体も存在しますが、どちらも会員数は日本全国で数十程度の規模で、群馬県内のコワーキングスペースの会員はいないようです。また、COWORK media, Coworking JAPAN, OFFICE PASS, SPACEMARKET, Workshop SPACE などといったウェブサイトでも検索してみても、群馬県内のコワーキングスペースは5つ程度しか登録されていません。すなわち、これまでは、群馬県内でコワーキングスペースを利用したいと思っても、どのような場所がどこにあるのかを一括して把握できない状態にありました。本書が現時点の群馬県内のコワーキングスペースを網羅できたことによって、少しでもコワーキングスペースが利用しやすくなればと思います。

また、コワーキングスペースの運営・利用の実態や生み出された経緯を記すことは、現時点における群馬県内の取り組みを記録することでもあります。第3章で見てきたように、様々な人たちの想いや行動の結果としてコワーキングスペースが生み出され運営がなされています。そして、様々な人たちが様々な形で利用しています。これらは、地域における経済活動であり、また地域そのものをつくっていく活動でもあります。こういった決して大きくはない日常的な活動は、大切なことであっても記録に残らないことがほとんどです。時代の変化に応じて移り変わっていつてしまう取り組みについて、一時点のスナップショットを記録できたことには意味があると考えています。

もうひとつの目的は、新しく登場してきている働き方や働く場所をお伝えすることでキャリアのヒントとしてもらうことです。大学教員ですので、講義やゼミを通じて学生に対してキャリアに関する情報提供やアドバイスをしたり、大学のキャリア支援について意見したりする機会は、もともと少なくありません。加えて、私は2019年度から大学でキャリアデザイン論という科目を担当することになりました。新たにキャリアに関係する科目を受け持ったことで、働くことを取り巻く環境が急速に変化している現代において、大学生に対して何をどのように伝えるべきかについて、より一層考えるようになりました。一口に大学生といっても千差万別ではありますが、いわゆる従来型の働き方や働く場所しか知らな

かったり、伝統的な仕事観やキャリア観しか持っていなかったり、という学生が思っていたよりも多いという印象を持っています。もちろん、新しい働き方や働く場所が古いものよりすべての面で優れているとは思いませんし、社会が変化しているからといってすべての人の働き方や働く場所が変わったり変えたりしなければならないということはありません。向き不向きもあれば好き嫌いもあります。しかし、新しい働き方や働く場所という新たに登場してきている選択肢やその背景を知らなければ、本当は選べたかもしれないより望ましい選択肢やこれから登場するであろう選択肢を見逃してしまうことにもなりかねません。これは大学生をはじめとした若い人に限った話ではないと思います。本書を通じて、キャリアを考える上での何かしらのヒントや選択肢を提示できていれば幸いです。

### 参考ウェブサイト

一般社団法人コワーキングスペース協会	<a href="https://coworking-japan.org/">https://coworking-japan.org/</a>
コワーキング協同組合	<a href="https://www.coworking.coop/">https://www.coworking.coop/</a>
COWORK media	<a href="https://co-work.media/">https://co-work.media/</a>
Coworking JAPAN	<a href="https://co-co-po.com/">https://co-co-po.com/</a>
OFFICE PASS	<a href="https://officepass.nikkei.jp/user/top.php">https://officepass.nikkei.jp/user/top.php</a>
SPACEMARKET	<a href="https://www.spacemarket.com/">https://www.spacemarket.com/</a>
Workshop SPACE	<a href="https://goworkshop.com/space/">https://goworkshop.com/space/</a>

### 謝辞

お忙しい中、快く調査に協力してくださった皆様に心より御礼申し上げます。また、執筆にあたって地域科学研究所の運営委員の皆様から貴重なコメントを頂きました。丁寧な校正作業を中心とした本書の刊行作業においては赤石宣広氏をはじめとした研究支援チームの皆様に変えてお世話になりました。ここに記して感謝申し上げます。なお、本研究は、各年度の高崎経済大学競争的研究費・特別研究助成金、2017年度からの三井デザインテック株式会社との共同研究、および、JSPS 科研費 19K13804 の助成を受けています。

## 執筆者紹介

若林 隆久（わかばやし たかひさ）

高崎経済大学地域政策学部准教授。1984年東京都生まれ。専門は、経営学、組織論、社会ネットワーク論。企業を中心とした組織や職場の研究の他、地域のコミュニティや地域で活躍する人についても研究を進めている。大学では、経営学、経営分析、キャリアデザイン論、産業立地論などを教えている。日本生産性本部 経営アカデミー 組織変革とリーダーシップコース グループ指導講師、一般社団法人経営研究所「人材開発と組織」研究会 コーディネータ、株式会社ゲノムクリニック 倫理審査委員会委員長、群馬県創業支援連携会議委員、などを歴任。

## 高崎経済大学ブックレットの刊行について

高崎経済大学の付置研究機関であります地域科学研究所では、経済学、経営学、地域政策学に係わる基礎的研究を行う一方、高崎市民、群馬県民のみなさまの生涯学習に寄与するために、公開講演会、公開講座、高崎市中央公民館との連携公開講座、地域の歴史や地域問題を学ぶ地元学講座、地域めぐり、そして中心市街地に復活し、本学学生が運営している cafe あすなろを会場とした市民ゼミなどの事業を展開しております。

今般、高崎経済大学では、高崎市民、群馬県民のみなさまに、高崎市の歴史や現状をよりよく知っていただく一助となるよう高崎経済大学ブックレットを刊行することにいたしました。

今後、様々な角度から高崎市の過去・現在・未来を考えてまいります。一読いただき、感想をお寄せください。また、取り上げてもらいたいテーマなどがありましたら、地域科学研究所までお寄せください。お待ちしております。

第3号は、地方都市にも新たに浸透してきている働き方や働く場所について、地域科学研究所・若林隆久所員（地域政策学部准教授・経営学）が執筆いたしました。新しい働き方や働く場所、および、その背景について説明しています。その上で、把握できた群馬県内のすべてのコワーキングスペースと、県外・海外のいくつかのコワーキングスペースを紹介しています。コワーキングスペースは、単に働くためだけの場ではなく、ときには地域づくりや地域の中と外を結びつける場となっています。身近に登場してきているコワーキングスペースを、ぜひ訪問・利用してみてください。



発行 2020年3月15日

著者 若林隆久

編者 高崎経済大学地域科学研究所  
〒370-0801

群馬県高崎市上並榎町1300

電話(027)344-6267

E-mail: chiikikagaku@tcue.ac.jp

©高崎経済大学地域科学研究所2020

印刷 / 有隆美堂印刷